

令和5年度

第41回
福祉体験

作文コンクール

優秀作品集



©aichikenshakyo



社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

はじめに

本会では、昭和五十八年から「福祉体験作文コンクール」を実施しています。本年度は、小・中・高等学校あわせて百八十七校、三百十九名の児童・生徒の皆様からご応募をいただきました。日常生活の中で様々な経験や家族などとの身近な体験、ボランティアや福祉実践教室などを通して気付いたこと、感じたことが素直な気持ちで作文に表されておりました。この作文コンクールにご応募いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

近年、様々な場面において児童・生徒などの若い世代が多様なボランティア体験や福祉活動に取り組む機会が増え、福祉やボランティアへの理解・関心が広まってきております。本会といたしましても、今後、地域福祉活動への支援や福祉教育活動への充実に向けて、より一層取り組んで参りたいと考えております。

このたび、選考委員会において厳正なる審査をし、二十七編の入選作品が決定されました。ここに、本年度の優秀作品集を作成しましたので、今後の福祉教育活動の推進にお役立ていただきたいと思います。

最後に、審査にご協力くださいました各委員の方々、作品の応募にご協力くださいました各小中高等学校、各市町村社会福祉協議会、さらにはボランティア関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

令和六年二月

社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会

はじめに	1
目次	2

小学校低学年の部

ベトナムはどんなにかな？	春日井市立高森台小学校	一年	荻野美音彩	4
はじめての日	北名古屋市立師勝小学校	二年	小春結花	5
のうぎょうで地いきに根づく助けあい	長久手市立西小学校	二年	田中遥馬	6
わたしに何かできること	豊橋市立豊小学校	三年	光部ほの香	7
ふくし体けん	高浜市立高取小学校	三年	小田陽介	8

小学校高学年の部

私のおばあちゃん	犬山市立犬山南小学校	四年	堀米虹羽	9
たくさんの人に支えられて	春日井市立玉川小学校	五年	右高理愛	10
キラキラの笑顔のために	小牧市立味噌岡小学校	五年	石井恋奈	11
人助け	高浜市立吉浜小学校	五年	具志堅麻緒	12
ぼくの耳	弥富市立白鳥小学校	五年	松崎圭佑	13
ぼくの思いとい場所	扶桑町立柏森小学校	五年	安藤樹生	14
僕のおばさん	岡崎市立北野小学校	六年	鳥取俊介	15
伸ばした髪がだれかの役に立つ	豊川市立長沢小学校	六年	内藤帆南	16
身の周りにある大切なこと	田原市立神戸小学校	六年	森葉津美	17



介護の大変さ……………	北名古屋市立師勝小学校	六年	小島 ひなた	18
ぼくの友達……………	長久手市立市が洞小学校	六年	丸山 翔	20
私が手話を勉強しようとしたきっかけ……………	幸田町立荻谷小学校	六年	村上 絢香	21

中学生の部

身近な募金の大切さ……………	岡崎市立新香山中学校	二年	市川 和樹	22
普段の暮らしで幸せを感じる……………	知多市立旭南中学校	二年	樋田 さくら	23
福祉援助の大切さ……………	北名古屋市立天神中学校	二年	水谷 心音	25
乗りこえた先には……………	弥富市立弥富中学校	二年	村上 琴音	26
兄から学んだこと……………	春日井市立柏原中学校	三年	荒井 仁文	28
私が見た輪……………	春日井市立柏原中学校	三年	荻野 愛香莉	29
大好きなお父さん……………	西尾市立寺津中学校	三年	小林 桃子	31
世代を超えて「共生」する……………	長久手市立南中学校	三年	川本 芽依	32

高校生の部

父の病から学んだこと……………	学校法人さくら学園安城生活福祉高等専修学校	二年	山本 悠真	34
当事者になって見えたもの……………	愛知県立桃陵高等学校	二年	大井 麻奈加	35

審査経過……………				37
-----------	--	--	--	----

作文コンクール要項……………				38
----------------	--	--	--	----

ベトナムはどんな感じかな？

春日井市立高森台小学校一年

荻野 美音彩

七月二十九日に、なごやのジャイカへいきました。ベトナムのともだちをつくらう！というイベントにさんかしました。まずいしょに、なごやきゅうひろばでたんけんしながら、せかいのこどもたちのせいかつをするクイズにちょうせんしました。

ここでもんだいです。いまちきゅうじょうでくらしている人のかずはなん人でしょうか？せいかいは、「八〇おく五千九百八〇まん三千六〇四人です！」なんと二びように、ひとりずつふえています。じぶんでみてびっくりしました。

ほかにも、バケツをもつところがありました。二つおいてあってもちあげると、とてもおもかったです。おもわず、

「うおりやあー！ー！」

とこえがでました。ほかのくには、まい日それをもって、八千ぼあるくそうです。わたしはびっくりしました。一つのバケツは十キロ、もう一つのバケツは二十キロのおもさでした。

つぎは、ベトナムのことをジャイカのスタッフに、おしえてもらいました。ベトナムのあいさつは、

「たらっあがん みおり」

というと、

「わたしのなまえはみおりです。」
といういみになります。

「サラーム」
は、

「こんにちは。」
といういみです。

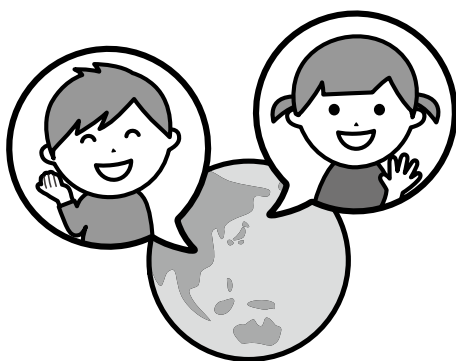
ベトナムのおともだちとは、オンラインでしゃべりました。マイクにむかって、はなすのはきんちようしました。

「すきなアニメはなんですか？」
と、わたしがきくと、

「ドラえもんです。」

とおしえてくれました。そのあとは、ベトナムからきていた、つばさにはんがっこうのRさんが、いろいろおしえてくれました。ベトナムには、「おいしい」というなまえのおかしがあります。どんなあじがするのかな？とおもいました。ベトナムには、バイクがたくさんはしっていて、三人のりもするそうです。あさごはんは、チャーハンやバンミ、フォーをたべるそうです。おひるは、アフリカのきゅうしよくをたべました。おいしかったです。

イベントがおわったあと、たいけんゾーンでワークシートをやりました。その中で一ばんびっくりしたのは、学校へかよえない子どもがいっぱいたったことです。どうしてかという、学校にかようのはあたりまえだとおもっていたからです。わたしはほかのせかいをまなびたいとおもっています。だから、学校のべんきようをこれからがんばりたいとおもいます。





はじめての日

北名古屋市立師勝小学校二年

小春 結花

わたしは、夏休みにおかあさんのしごとばの「デイサービスひかり」というところに行きました。そこは、しょうがいしゃの人たちがかようところです。おかあさんは、そこでアロマの先生として教えたり、マッサージをしてあげたりしています。

おかあさんから話は聞いていたけれど、車いすにのった人たちをはじめて近くで見たらすごくきんちょうしました。みんな一人ではうごけなくて、すこししか話ができません。

たまに大きなこえを出したり、うごいたり、ほっさというものがたりしました。そのたびにわたしは、おかあさんの近くにいつてすこしかくれて見ていました。ちょっとこわいなとかんじました。スタッフの人は、あわてずにおせわしていました。わたしだけが、体がかたまつてボーッとしていました。

おかあさんは、みんなから「先生」とよばれていてびっくりしました。しゃべり方もいつもとちがつてかつこよかったです。アロマは、体にとつてとてもよいことがあるそうです。

その日は、みんなでアロマの虫よけスプレーづくりをしました。さいごにスプレーのようきをふるときわたしは、しょうがいしゃの手をにぎっていっしょにふりました。その手は、とてもほそくてふわふわでやさしくようきをにぎっていました。わたしは、きんちょうしたけどさっきまですこしこわかった気もちがなくなりました。

そのあとは、アロママッサージのおてつだいをしました。アロマのかおりのするあたたいタオルを、おかあさんといっしょにしょうがいしゃの人のうでにやさしくつつんであげると、その人はすこしにこつとえがおになったように見えました。おかあさんがマッサージをするとみんな力がぬけて気もちよさそうなかおになっていました。「アロマのこうかだよ」とおかあさんは言いました。よくわからなかったけど、気もちいいとかんじるのは、みんな同じなんだなと思いました。

スタッフの人たちは、たいへんそうだけだのしそうにしょうがいしゃの人にたくさん話しかけていました。そして、わたしのおかあさんもアロマでしょうがいしゃの人たちのやくにたっているのが分かって、かっこいいなと思いました。

はじめて行ったデイサービスというところ、はじめてさわったしょうがいしゃの人の手、はじめて見るおかあさんのすがたでむねがいっぱいになった一日でした。

「らいねんの夏休みもおてつだいをしてくれる？」とおかあさんに聞かれて、「うん」とこたえました。



のびぎょうで地いきに根づく助けあい

長久手市立西小学校二年

田中 遥馬

「こんにちは！」

名前も知らない人と気軽にあいさつをすることが出来る場所が多くの住む長久手市にあります。

それはふれあいのう園という場所です。長久手市民が自然とふれあい、コミュニケーションをとりながら作る畑です。コロナがはやってどこにも行けなかったので、ぼくたちの家族は二〇二一年から畑を借りて生まれて初めて作物を育てました。

ズッキーニを育てようとしたのですが、最初はなかなか上手に育てられませんでした。となりの畑を作るのが上手なおじいさんに育て方を教えてもらってやつと花がさいて実をつけるところまで育てられました。

「ズッキーニが大きくなってきたから、そろそろ収穫の時期だね。」

と、おじいさんに言われて、喜んでいました。ところが、次のう園に行ったときには動物に食べられていました。収穫して食べるのをとても楽しみにしていたので、ぼくはとても落ちこんでしまいました。そんなとき、近くの畑のおじいさんに、トマトのつるを切るお手つだいをたのまれたので、気持ちをきりかえて、お手つだいをしました。

「次は、これもやってみるかい。」

と、きゅうりの収穫もやらせてもらえました。両手にいっぱいいきゅうりをとりました。すると、

「お手つだいありがとう、おみやげにきゅうり持って帰っていいよ。」

と、おじいさんが言ってくれました。ズッキーニは動物にゆずったけど、自分でとったきゅうりの味はとてもおいしかったです。多くのズッキーニを食べた動物も喜んでくれているといいな。

生まれて初めてのふれあいのう園は作物の育て方だけではなく、人との関わり方や生き物との共ぞんの仕方も学べる場所でした。

この体けんを通しては、ふれあいのう園を学校に作りたいと思うようになりました。なぜなら、みんなで畑を作れば学校でふだん話さない友達とも仲良くなるきっかけが生まれるからです。もう一つは、学校が地いきの人たちにとっても、せつきよくてきにさん加しやすい、いいの場になりそうな場所にあるからです。「日本一若いまち」だからこそ、若いぼくたちとけいけんゆたかな地いきの人達が手を取り合って、学校でのうぎょうをするのはとても価値がある生がい学習になると思います。





わたしに何かできること

豊橋市立豊小学校三年

光部 ほの香

わたしは夏休みに学どうクラブのみんなとバスと電車にのって科学館へ行きました。道のとちゅうで、先生が

「みんな、道をあけて。」

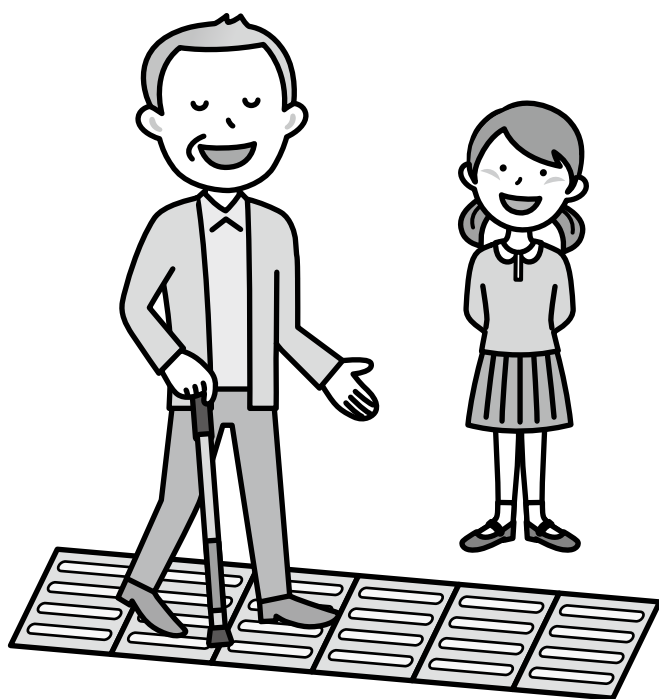
と言いました。白いつえで地面をつきながら歩いている人がいました。つえが白かったので、目が見えない人だとすぐ分かりました。ママから白いつえは目の見えない人が使うと聞いていたからです。初めて白いつえを使っている人に会ったのでおどろきました。家に帰ってこのことを家族にも話しました。

それから目が見えない人がどうやって出かけているのか二つのことを調べました。

一つ目は、点字ブロックです。足のうらのかんかくで進んだり、止まったりできるように、線と点を表面につけた物で、目の見えない人があんなに歩けるように、地面にせっちされているブロックです。わたしの通学路にもせっちされています。今まで子どもが道路にとびださないようにするためのブロックだと思っていたので、その意味を知っておどろきました。

二つ目は、音きょうしん号きです。これは歩行しゃ用しん号が青のとき音を出して、今ならおうだんできますよ、と音で知らせるものです。わたしが聞いたことがあるのは、ピヨピヨとカッコーです。目が見えない人はしん号きが見えないので、とてもべんりだと思いました。調べて

みたらとおりゃんせと、こきょうの空というメロディーの音きょうしん号きもあるそうです。どこにせっちされているか、さがしてみたいです。社会にはいろんな人がいます。目が見えない人だけではなく、耳が聞こえない人もいます。わたしは、目が見えない人には、道をゆずり、点字ブロックの上に立ち止まらず、またすわらないようにしたいです。耳が聞こえない人は、口元がわかるようにゆっくり話したり、手話をおぼえたりしたいです。いろんな人のために、何かできることを一つずつしていきたいと思います。



ふくし体けん

高浜市立高取小学校三年

小田 陽介

ぼくは、総合のじゅぎょうでふくしについて勉強しています。六月に車いす体けんがあり、そこでぼくは、はじめて車いすに乗りました。

車いすの体けんをして分かったことは、車いすでの生活が思っていたよりも大変だということです。かいだんだけでなく、ちょっとしただんさでも、車いすを持ち上げたり、友だちの乗っている車いすをおすのが大変でした。今まで一人で歩いて行くことができた場所も、身体のお自由な人は、だれかの手をかりないといけないので、大変だと思いました。車いすに乗って、一番こわかったときは、友だちに車いすを持ち上げてもらって、かいだんを上るときです。でも、みんながぼくに声をかけてくれたので、安心しました。車いすを持ち上げたりして、車いすに乗っている人を助けるときには、声をかけることが大事だと思いました。

じゅぎょうの中で、ぼくはし体ふ自由しようがいの方にインタビューをしました。ぼくが、

「今日は学校まで、どうやって来ましたか。」

と聞くと、その方は、

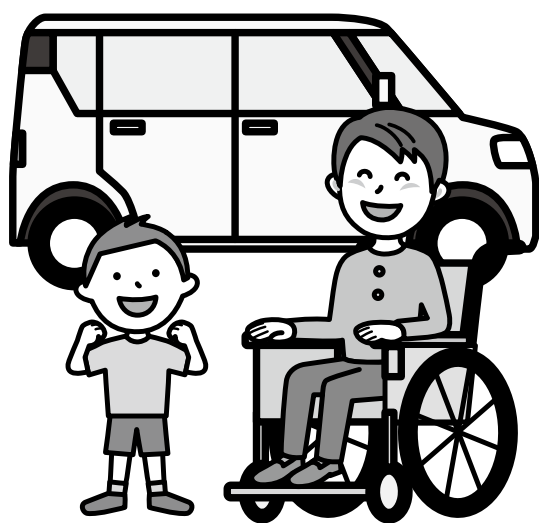
「車で来たよ。」

と教えてくれました。身体がふ自由な人でも運転できる車があることは知っていたけれどどんな車なのか気になりました。すると、

「身体がふ自由でも、レバーとボタンをおすだけで運転できる車なんだよ。」

と教えてくれました。今度、車の中がどうなっているのか見てみたいと思います。車いすに乗っていると、小さなだんさでもいどうが大変でした。なので、身体がふ自由でも運転できる車があるのだと思います。しようがいがあってもくらしやすくなるものは、たくさんあると思います。町にはエレベーターやスロープで、車いすの人が生活できるようにされているところもあります。でも、もっとみんながくらしやすい町になっていくといいなと思いました。小さなだんさなどがない、バリアフリーのお店や駅が、たくさんできるといいと思います。また、ぼくはまわりの人たちとコミュニケーションをとって、何かがあつたときに手助けをすることが大切だとも思いました。エレベーターやスロープがあるから何もしないのではなく、みんなが行動することも、もっとくらしやすい町になるために大切なことだと思いました。

車いす体けんをして、車いすに乗っている人や、身体がふ自由な人の気持ち分かりました。これからは、車いすに乗っている人がこまっていたら、声をかけて手助けをしたいと思います。





私のおばあちゃん

犬山市立犬山南小学校四年

堀米 虹羽

私のおばあちゃんは、にん知しようです。私が一才の時にしんだんされたそうです。にん知しように分かった時、おばあちゃんは、家族のこともいつか分からなくなってしまうたり、いろいろなことができなくなったりしてしまう、何より私がまだ小さかったのでこれからたくさんお世話をしてあげなくてはいけないのに「ごめんね」と泣いていたそうです。そんなおばあちゃんでしたが、私が小さいころはよく家に遊びに来てくれたり、いっしょに遊びに行ったりしてくれていました。やさしくておもしろいおばあちゃんとすごして楽しかった思い出が私の心の中にあります。

みんなで何とかおばあちゃんのにん知しようにおそうと、おばあちゃんの好きなぬり絵をやったり、計算をしたり、マッサージをしたりした記おくもあります。

あれから何年かたって、今はほとんどのことができなくなってしまうました。いまは自分で歩くこともできなくなつて車いすで生活をしています。

週に一日だけせつから帰ってくるので、お母さんといっしょにおばあちゃんに会いに行つて、お世話のお手伝いをしています。話しかけると私の名前をよんでくれたり、笑顔で少しだけですが話をしてくれます。

手伝いをしているうちにおばあちゃんが快てきにすごせるように、しせつの人、かいご用品の会社の人、病院の先生などのたくさんの方が工夫してくれていることを知りました。いろいろな人が関わって助けてくれていることを知って感しゃの気持ちでいっぱいになりました。

おばあちゃんににん知しようにでも、赤ちゃんだった私のお世話をたくさんしてくれました。だから、今は私がおばあちゃんをたくさん助けたいです。

大好きなおばあちゃんが笑顔でいてくれることが、おじいちゃんもお母さんもおばあちゃんも幸せだと思うので私が笑顔にしてあげようがんばりたいです。



たくさんの人に支えられて

春日井市立玉川小学校五年

右高 理愛

福祉について考える時、「人のために出来る事」に目を向けるが、私は助けられる側としてこの作文を書きたい。

私は生まれつきの弱視だ。不同視弱視といって、かた方の目の視力が極端に悪い。私の場合は左目である。右目は視力があるので見えない訳ではなく、弱視と診断された五才まで、私はみんなと同じように見えていると思っていた。

たまたま眼科で視力検査をして弱視が分かり急にメガネをかける生活になったが、私にはメガネをかける事以外、何も変わらなかった。ただ、「かわいそう。」

「こんなに小さな時からメガネなんて。かわいそうに。」

と知らない人から声をかけられるようになった。かわいそうと言われる理由は、今なら他の子と違うからだと分かる。幼稚園にも弱視の子は、私の他に一人しかいなかった。だから、小さな子がメガネをかける事は、当たり前ではなかったからだ。でも、

「かわいそう。」

その言葉だけが、メガネをかけ始めた五才の私の中に残った。

私は五才から毎日メガネをかけ、一日に一時間、左目の視力を上げるために右目を隠すアイパッチ治りようをしている。眼科の通院も五年が経ち、説明をされなくても検査内容や順番も分かるようになった。私はメガネをかけるという生活になったただだが、メガネをかける、治りよ

うをするという事は、眼科の先生、訓練士さん、弱視を補助してくれる市、メガネ屋さん、たくさんの人が私の視力を上げるために時間を使い関わってくれているのだ。でもそういう方々には、一度もかわいそうと言われた事がない。それは、弱視についての知識があり、たくさん弱視の子を見ているからだと思う。この時、知っているだけで言葉も見方も変わってしまう事を知った。もしかしたら私も知らない間に、人にかわいそうと言って傷つけていたかもしれない。自分が傷ついた同じ言葉で、人を傷つける事だけはしたくないと思った。

世の中には多くの病気があり、治りようをしている人もいる。みんなと違う事があると、その部分に目がいってしまいが、病気の○○さんではなく、その人自身を見るようにしたら、かわいそうという言葉はパッと使わなくなるかもしれない。どんな病気であっても、私達は病気とは関係のないそれぞれの心を持った人間なのだから。

私は、メガネをかけて良かった、弱視でよかったと思った事は一度もないが、弱視ではなかったら、ここまで人に助けられている、関わってくれていると知る事はなかったと思う。この作文を書きながら、改めてたくさんの人が私の治りように関わってくれている事を感じ、うれしくなった。

私の弱視はたくさんのおかげで良くなってきているが、遠視が強いので私はまだメガネとのお付き合いが続くそう。五才でかわいそうと言われ傷ついたが、同じメガネをかけていても十一才の私は、多くの人に支えられている事を知り毎日笑っている。

次の診察ではいつもより心を込めて先生や訓練士さんに伝えて帰ろう。「ありがとうございます。」





キラキラの笑顔のために

小牧市立味岡小学校 五年

石井 恋奈

私の兄は自閉症という障害をもっています。小さい時から周りの人とは違うなと思っていましたが、障害者ということのを両親からきちんときくまでは、兄はなんでもお兄ちゃんらしくないんだろうと思っていました。学校でも私達のいるクラスではないところに行ったり、どこに行くにも大人が付きそって、勉強も私よりできませんでした。今年の、総合学習の時間に、障害者のことを勉強する時間があり、初めて障害のことを知ることになりました。それから、今までは兄と一緒にくらしていく中で、あまり気にしていなかったことが、気になるようになってきました。そして母に兄の病気のことを思いきって聞いてみました。母はまず兄の通う特別しえん学校へ私を連れて行ってくれました。そこで私は、初めて色いなる障害を持つた人達を見ました。車イスの人、歩行器の人、ねたままの人。正直少しびっくりして何もしゃべれなくなっていました。私がいる世界に、こんなに大変な人達がいたんだと思うと悲しい気持ちになりました。母に正直にその気持ちを話すと「みんな初めは同じ気持ちになるよ。」と教えてくれました。父も母も、兄が障害者だと分かった時、とても悲しかっただろうな、不安だっただろうなと思います。でもいつも笑っていて、兄が少しでも新しいことができると思ふたり、苦手なことは助けてあげたりしていて強いなと思いました。私も何か役に立ちたくて、母に兄のことで何かもつと助けてあげたいと話したら、兄と夏休みに福祉し設の見学に行く時に一緒に連れて行ってくれました。し設の中には大人の人が二十人くらい

いて、みんながその人の得意なことを仕事にして働いていました。私も作品を見せてもらったり、働いている人の近くまでいって職員さんから話を聞いたりしました。一人一人ができることをみんなのためにやっているんだよと教えてもらいました。物作りができる人は、手作りで作った物を売る。野菜作りの人達は、作った物をスーパーで売ったりお店を作ったりする。作るのができない人は、物作りで働いている人達のために食事やお茶の準備をする。みんながだれかのために動いていて、とてもやさしい気持ちになりました。職員の人も、障害者さんが気持ちよく仕事ができるように、むずかしいところはサポートしたり、話し相手になったりして見守っていました。また、障害者さんが一人でできることを増やしていつて、将来自立ができるように日常生活訓練もしていました。中にはとても人なつっこい人もいれば、音や光が苦手な人、体が不自由な人もいて、障害もみんな違うことを知りました。

今回私が行ったし設は、まだ軽度といわれる人が行くところで、私の住む小牧市にも、たくさんし設があつて、その場所によつて障害者さんが利用するし設を選べるようになっていてと教えてもらいました。私があつた人達は軽い障害でも私達よりたくさん大変さをもっていました。でも、みんな楽しそうに笑顔がいつぱいでやさしい気持ちがあつたさんありました。ハンデがあつてもだれかのために動くことは、障害がある人もない人も同じように大切で、思いやりでみんなが幸せになると思ふます。私が思つていたし設は暗くてベッドだらけの所だと思つていたけど、本当は笑顔とやさしさがいつぱいの明るいつし設だということを知りました。今回のことで私ができることは、まずは障害を知ること。もつと障害の世界を見て学ぶことだと思ふました。自分には関係ないと思ふて見ぬふりをしないで、世の中には助けを待っている人がいるから、一人でもたくさんの人を助けてあげてほしいと思ふました。私はまだ子どもでもできることは少しの力にしかならないかもしれないけど、まずは兄がいつつも笑顔で楽しく生活できるように、私も家族の一員としてサポートしていきたいなと思ふました。

人助け

高浜市立吉浜小学校五年

具志堅

麻緒

この話は、私がちょうど四年生のころの出来事です。私がある困っている人を助けようとしたときの考えや思い、その後自分がどう変わったかを作文にし、書きました。

その日は、友達といっしょに遊んでいました。その帰り、私が友達を送ることになりました。友達を近くの公園に送り、私が帰ろうとしていたとき、帰りの道に歩いている人がいました。その人は、目が見えない人でした。私は、実際そのような人をあまり見たことがなかったのですが、少し気になってしまいました。ですが見ていると、その人は困っているように見えました。同じ道を何度も行き来して、私は少し心配になってしまいました。なぜなら、そこには目が見えない人が使う点字ブロックがなかったり、車も通るような場所だったからです。ですが、声をかけていいのかというところも少し心配でした。なぜなら、目が見えない人にとって、私が誰かも分からないし、いきなり声をかけてしまったら逆にびっくりさせて危ないのではないのかと思いました。でも、学校で学んだことを思い出し、考えてみました。色々考えて私はその人に声をかけることにしました。そして私はその人に「あの、大丈夫ですか。」と、びっくりさせないように聞きました。その人は、びっくりせず、ていねいに「すいません、この道あまり使ったことがなくて。」と、申し訳なさそうに言いました。私はそうなんだと思い、「どこに行きたいんですか。」と聞いたら、私がさつき友達を送って行った公園に行きたいと言

ました。私はその人と一緒にその公園まで少しお話ししながら行きました。公園に着いて私が「この公園でいいですか。」と聞くと、その人は、「はい、大丈夫です。いい人ですね。ありがとうございます。声をかけてくれて感謝しています。」と、言ってくれました。そのとき私は、勇気を出して声をかけて本当に良かったと思いました。そして、その人の言葉を聞いて、助けるという判断をしてよかったと心から思いました。その人を送った帰り、私は色々な事を考えました。あの人はもう大丈夫かなとか、その後私はあの人が私に言ってくれた言葉について考えていました。何で誰かもわからない私に「いい人ですね。」と、言ってくれたのか、少し気になってしまいました。なので、帰った後にお母さんに聞いてみることにしました。

お母さんに聞くと、「それは、あなたがそれほどこをしたらからよ」と、言ってくれました。その言葉を聞いて私は、本当にいいことをしたんだと改めて実感できました。これからは、あの人が言ってくれた言葉をこれから、色々な人から言ってもらえるようにしていきたいと思いました。そして、そのおかげで、少しだけ勇気を出して行動できた自分に自信がわいてくるような気持ちになりました。





ぼくの耳

弥富市立白鳥小学校五年

松崎

圭佑

ぼくは中等度難聴で補聴器をつけています。ふつうに聞こえているように見えますが、本当は聞きとりにくいことも多いです。補聴器をつけないと、小さい声やぼそぼそ話す声は聞こえにくく、グループでの話し合いは、補聴器をつけていても聞きとりづらいです。周りがざわざわしていると、音全部が交ざりあって、色でいうなら黒色のようなイメージです。その中で、ぼくが学校生活を送るためにはいろいろな工夫が必要です。

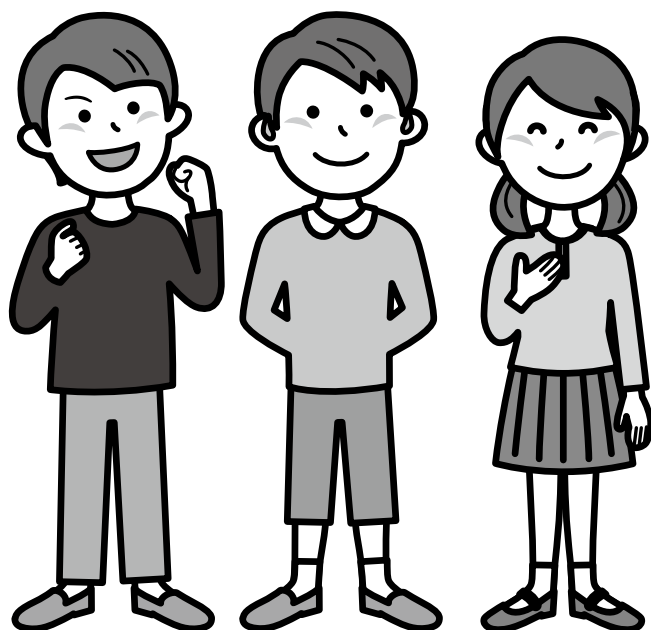
第一に、先生が話していることをゆうせんに聞こうと心がけています。そのためには、しゃべっている人に集中することが大事だと思っています。なので、だれかが話しているときに、静かにしてくれるのとはとてもありがたいです。

第二に、最近使い始めたロジャーです。ロジャーを使うと、先生の声が直接ぼくにとどくのでとても聞きとりやすくなります。小さい音や、さわがしい中での会話も聞こえるようになります。ロジャーのおかげで、苦手なグループ活動もやりやすくなりました。

もちろん、ぼくだけの工夫で成り立っているわけではありません。先生や友達は、ぼくが聞こえやすいように話してくれるし、聞きとりにくいことがあればみんなが教えてくれます。話すときは、ぼくのほうを向いて話してくれるので会話がしやすいです。ぼくが聞きとれなくて気づけていないときに、気づいて教えてくれる友達もいます。補聴器やロ

ジャーがぼくにとって大切なのは当たり前だけど、こうやって助けてくれる友達がいることはとてもうれしいし、ありがたいことだと思っています。でも、自分でできることは、できるだけ自分でがんばりたいという気持ちもあります。こまったら、だれかが助けてくれると分かっていることは、ぼくにとっても心づよいです。

これからも大変な事がたくさんあると思うけど、ぼくには味方でいてくれる家族や先生や友達がいます。自信を持って、ぼくなりにこれからもがんばっていききたいと思っています。



ぼくの思いとい場所

扶桑町立柏森小学校五年

安藤 樹生

ぼくは夏休みに家族と江南市社会福祉協議会に行きました。キッチンカーが来ていてみんなにごはんをわたしたり勉強ができる部屋を解放していました。ごはんはカレーピラフとりめしがあつて大人二百円、子ども百円で食べられました。大人も子どももたくさんの人が来ていてきがるに行けました。みんな楽しそうでした。ぼくも勉強したりごはんを食べました。ごはんはおいしかったです。勉強も集中してできました。江南市福祉協議会のキッチンカーは子どもの支援、地域づくりの支援につながるようにごはんやい場所をていきょうするため、夏休みに何か所かでかいさいするようです。職員さんは親切でやさしかったです。

ぼくは四年生の中から学校へのちこくが多くなりました。五年生はもつとちこくが多くなりました。五年生は学校のストレスがあつたからちこくが多くなったと思います。朝、とくにおながいたくなるが多くて学校へちこくになりました。ストレスで学校をこわしたいと思つたこともあります。

ぼくは二学期から学校へちこくのないように行きたいと思います。みんなもがんばって学校へ行くからです。家族は、学校も楽しいことはあるし、ぼくの学校に朝から行きたい気持ちを応援すると言いました。けどむりはしなくていいとも言いました。家族とは学校のことをたくさん話し合いました。家族からは

「学校に、ちこくしたり行けないことをみんなとちがうと思わなくていい。学校がすべてではない。」

「なやんだ時はできないことよりできることに目をむければいい。」

「人を悲しませることをしなければ勇気がいるけれどちがった生き方をせんたくしてもいい。」

と言われました。また

「いつきのまわりには誰がいる？」

とも聞かれました。

ぼくのまわりにはじゅくの先生や友達、家族、病院の先生がいます。キッチンカーに行ったようにつながれる人もいることが分かりました。い場所も、学校に行きたくないならじゅくの先生からじゅくの自習室に来ればいいと言われています。家族からは家でも図書館でもすごしていと言われています。またかいさいされれば江南市社会福祉協議会のキッチンカーと勉強ができる部屋に行ってもいいと思いました。

ぼくのまわりにたくさんの方がいてい場所もあることがわかりました。何かあれば話をしたいと思いました。ストレスがある時に話をするとすっきりしました。みんなにもそうしてほしいと思いました。





僕のおばさん

岡崎市立北野小学校六年

鳥取 俊介

僕のおばさんは、知的障害をもっています。知的障害と一言で言っても、分からなかったので調べてみると「知的障害とは、金銭管理・読み書き・計算など、日常生活や学校生活の上で頭脳を使う知的行動に障害があること。」と、ありました。

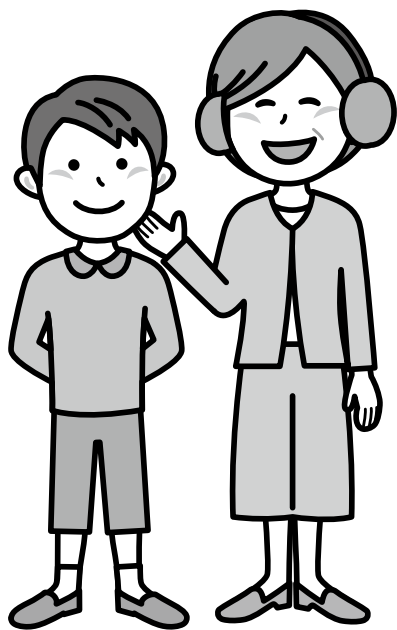
僕のおばさんは、言葉を話すことができません。言葉の代わりに「ウー」と声を出していることがあります。また、周りの音や声が敏感に聞こえてしまうようで、そのことが苦手で、常に耳を押さえて過ごしています。

僕は、おばさんのことを「あやちゃん」と呼んでいます。あやちゃんが、僕の名前を呼んでくれたことはないけれど、そのかわりにぼくのほをポンポンと優しくたたいてくれます。それが、あやちゃんのあいさつです。僕は、言葉がなくてもそのあいさつでほっとするし、心が通じ合える気がしてうれしくなります。

あやちゃんは、障害のある人達が作業をする障害者施設に通い、毎日紙破りなどの軽作業をしています。一度、その施設の秋祭りに行ったことがあります。車椅子に乗った人や大きい声を出して飛びはねている人、いろいろな障害のある人が参加していました。障害のある人は、僕の視線まで前かがみになってっこり笑ってくれたり、「こんにちは」と声をかけてくれる人もいたりして、とてもうれしかったことを覚えています。障害のある人を支援する人もみんな明るくてほっとする場でした。

でも、あやちゃんと買い物に出かけた時、僕の横で耳を押さえて「ウー」と声を出しながら歩いているあやちゃんを見て、すれ違う人達がじろじろ見てきたり、「何あの人」みたいな表情でひそひそと小声で言っていたりすることがありました。とても冷たい視線が、全身につきささりました。何も悪いことをしていないのに悪いことをしているみたいに感じて、とても嫌な気持ちになりつらかったです。母は、あやちゃんと姉妹で小さいころからずっと一緒だったので、出かけた時の周りの視線のことを聞いてみました。すると僕と同じような経験を何度もしたこと、僕と同じ気持ちだったことを教えてくれました。僕は生まれた時から障害があつたあやちゃんが身近な存在だから、同じように障害のある人を見かけてもびっくりすることはありません。でも、障害のある人と接しことがない人達は、障害者の行動を不思議に思ったりびっくりしたりすることもあるのかなと思います。

僕は、身近に障害のあるおばさんがいて生まれた時から接していること、母から障害について教わったことで、障害者への理解は少しあります。だから僕は、障害者の人達に向けられる視線が温かくなるように、僕が知っている障害のことや経験を、知らない人に伝えてあげられる存在になりたいです。



伸ばした髪がだれかの役に立つ

豊川市立長沢小学校六年

内藤 帆南

私は夏休みにヘアドネーションをしました。ヘアドネーションとは、病気が原因でかつらを必要としている人達に、カットした髪から作った医療用ウィッグを無償で提供している活動のことです。できるだけ自分の髪の毛に近い人毛を使うことで、かつらであることの不自然さが無くなり、ウィッグを必要とする人達の心の負担がかなり軽くなることが期待されています。

私は小学三年生の時に見たテレビ番組で、初めてヘアドネーションを知りました。とても良い活動だと感じたので、自分も切った髪の毛を寄付したいと思いました。その時から私は髪の毛を伸ばし始めることにしました。

ヘアドネーションのカットをする日まで、私はヘアケアを毎日念入りにしてきました。サラサラのきれいな髪を寄付したいからです。そんなある日、友達が、

「髪の毛きれいだね」

と、ほめてくれました。ヘアケアの成果が出ていることが分かってとてもうれしくて、これからはがんばろうというやる気も出てきました。

でも、大変なこともありました。髪の毛が長いと、お風呂や水泳などで髪がぬれた時になかなか乾きません。ドライヤーで髪を乾かす時間も長くなるので、夏は暑くて早く髪の毛を切りたいと思ったこともありました。

ヘアドネーションを知って髪を伸ばし始めてから約三年。私の髪はこの辺りまで伸び、五十センチを越えていました。いよいよ美容院でヘアドネーションのカットをする当日。私はとても楽しみでしたが、初めての体験なので少しだけきんちょうもしていました。

美容院に着くと、私のカットを担当してくれる美容師さんが優しくむかえてくれて安心できました。私が、

「三年間ぐらいい髪を伸ばしました。」

と話すと、美容師さんは、

「すごいじゃん！よくがんばったね。」

と言ってくれて、がんばって髪を伸ばしてきた良かったな、と思いました。美容師さんのおかげで私の心の中のきんちょうは消えていき、とてもわくわくした気持ちに変わっていききました。

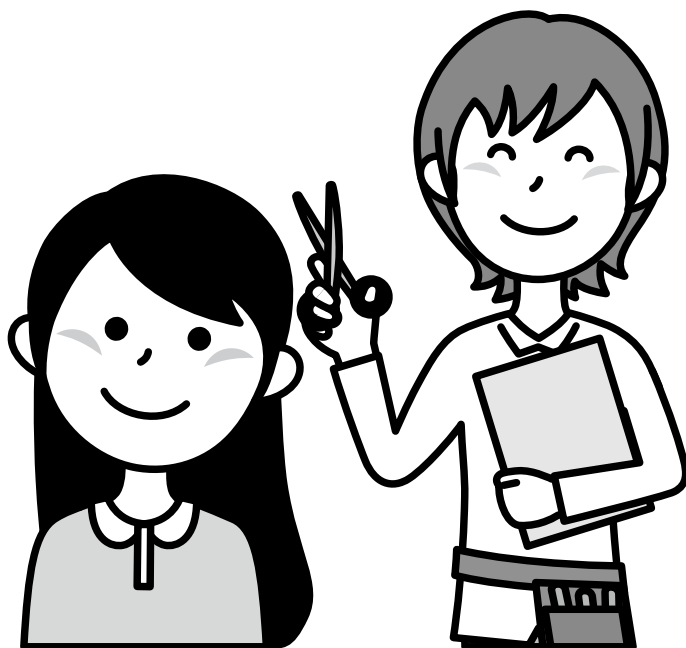
でも、いざ髪を切り始めてがんばって伸ばした髪が短くなっていく姿がかがみに映ると、少しさびしく感じました。まるで自分ではないみたいに見えました。それでも、美容師さんが、

「こんな感じでいい？」

と何度も聞きながらカットしてくれたので、希望通りの髪型になって大満足でした。

私が切った髪の毛の長さは、約三十五センチでした。私の髪の毛で作られたウィッグが、使ってくれる人に気に入ってもらえたらいいなと思います。また、ウィッグを使うことで少しでも明るい気持ちになってくれたらうれしいです。

今回ヘアドネーションの髪を寄付したことで、私も困っている人の役に立つことができたのかなと思いました。美容師さんの話では、最近ではヘアドネーションのカットを希望するお客さんが増えていて、なかには二回目の寄付をする人もいます。夏休みの自由研究の題材にした子もいたと聞きました。その話を聞いて、たくさんの方が困っている人を助けようとしていて素敵だなと感じました。



でも、まだヘアドネーションという活動を知らない人も大勢います。ヘアドネーションは、髪の毛を伸ばす努力をすれば誰でも困っている人を助けることができる活動だと思うので、もっともっとこの活動が広がることを願っています。

身の周りにおける大切なこと

田原市立神戸小学校六年

森 菜津美

私は身長が低い。年下の五年生よりも身体が小さくて、三年生にも身長を抜かされそうだ。「チビ」とバカにされることもある。そういわれるたびに悔しくなる。でも身の周りには私よりももっと悔しい思いをしている人がいるのではないかと考えた。例えば目が見えない人…。

ある日、学校に目が見えないYさんという女性が来た。私と同じ学校に通っている子のお母さんだった。Yさんとの交流会で、Yさんはとても生き生きとしていた。その姿は、とても印象的で、私の目に強く焼き付いた。しかし、大人になってから次第に目が見えなくなってしまったという話を聞いて、かわいそうだなと思ってしまった。引き続き話を聞いている中で、心に刺さった言葉があった。『できないことよりも、できることを増やす』という言葉だ。それを聞いて、かわいそうではないと思った。かわいそうだという思いは、勝手な先入観であると気付いた。そもそも、私はこれまでに、障害のある人の気持ちを考えたことがなかった。今回大切なことに気付かせてくださったYさんにはとても感謝したい。

Yさんは最後に歌を歌ってくれた。本当に目が見えていないのかと疑ってしまうほど、ギターを上手に弾いて歌っていて驚いた。目が見える私たちよりも、生き生きと楽しそうに元気でいるように輝いて見えた。Yさんが作詞作曲した『ありがとう』という曲を聴いて涙があふれた。歌の中で『かっこいいお母さんになりたい』という言葉があったけれど、

Yさんはもう十分にかっこいいお母さんだと私は思った。

私は、四年生の頃から目が悪くなってきた。今振り返ると、私は自分の目を大切にしてこなかったかもしれない。目が見える人が目を大切にしないでどうするの、と心の中で自分に問いかけた。その瞬間、ぴんときた。スマートフォンを見るための目ではないし、目が見えていることが当たり前でもないことに気付いた。美しい世界を見たり、勉強したり、身の危険を防いだり、自分のために見えるありがたい目なのだと思った。

これからは、Yさんのような人と積極的にたくさん関わっていききたい。身近にチャンスがあれば、交流会にも参加したい。Yさんは、私の心の中であれからずっと輝いている。私もYさんのように生き生きと前向きに生きていきたい。大人になったときに、周りの人にも輝きを届けられるように。



介護の大変さ

北名古屋市立師勝小学校六年

小島 ひなた

私は人の役に立つ介護の仕事にもともと興味がありました。お母さんが福祉施設で働いているということもあり、今回、話を聞くことにしました。

介護とは、高齢者や病気で手助けが必要な人に、安全を第一として身の回りのお世話をしたり、自立を目指してお手伝いをしたりすることだとはじめに教わりました。介護で目指すのは、自分でできていたことをまた、できるようになることで、少なくとも今の状態を保つことだとのこと。それには、なんでもかんでも、手伝ってはいけないのだと知りました。手助けが必要な人たちなのに、なぜ手伝ってはいけないのか聞くと、手伝ってしまうば簡単なことでも、さらにできなくなってしまう、またはやらなくなってしまうため、できることはやってもらう必要があるとのことでした。その人その人で出来るはん囲を見極めて、お手伝いをするのが大事だと知りました。また、「できない」というのは、どうしてできないのかを考える必要があるとのこと。食べないという行動一つでも、すぐに食べるのを手伝うのではなく、どうして食べないのかを考えていくのが大切だとのことでした。おかずの大きさが食べづらかったのか、入れ歯が合っていないのか、体調が悪いのかもしれない。いろいろな原因が考えられるので、よく観察して、いろいろな可能性を考えていかなければいけないと言われ、なるほどと思ったし、難しいなとも感じました。



介護の仕事でとても大切なことが、高齢者を人として尊重することだそうです。今までの人生がそれぞれあるのだから、軽んじることなく、敬う気持ちが大変だと熱心に話をしてくれました。ため口や上から目線にはならないように、車いすと同じ目線の高さに合わせ、ていねいな言葉で接することを心がけるようにして、「してあげる」ではなく「させていただく」と表現するのだと教わりました。

福祉施設で求められるものは、過ごしやすさだとのこと。施設にはいろいろな人がおり、それぞれのペースがある。利用者が大勢いる中で、一人一人に寄りそい、その人にとって何が大切なのかを考えていけると素敵だと話してくれました。お母さんがなにより大事にしていることが、一歩先の気づかいだそうです。相手の立場になって物事を考えることが基本で、例えば、前の人が使った後のトイレが少し汚れていたなら、自分なら次に入りたくないはず。いすの高さが高そうなら、足置きを置くなど、小さな配りよがどれだけ人の心を温かくするか、知ってほしいと言われました。そういう気配りができる人を目指していると話すお母さんは、素敵だと感じました。

なかなかできなかったり、たいしたことではないことも時間がかかったりしていると、いやに思えてしまうこともあるけれど、プロならそれを表には出さない。百回同じことを聞かれても、百回笑顔で答えられるように努めていると、胸を張って教えてくれました。また、利用者さんが喜んでくれたり、その人の助けになったときにやりがいを感じられるし、笑顔で「ありがとう。」といってもらえたら、また次への活力になるのだと話してくれました。

私は介護について、実はもっと簡単なことだと思っていましたが、話を聞けば聞く程、大変だという印象になってしまいました。お母さんに素直にそう話すと、「どこまでいねいであたたいお世話ができるかが大事で、奥が深いのだと感ぜてもらえればいい。今は難しくても、大

人になるにつれて気付けることもある。」と言われました。人への気づかいは今からでももちろんできるので、友達に思いやりをもって接して、日頃からそのスキルを磨いていきたいと思っています。



ぼくの友達

長久手市立市が洞小学校六年

丸山

翔

福祉について作文を書こうと思ったとき、ぼくの身の回りには福祉がとてたくさんあることに気づきました。ぼくのお父さんとお母さんは放課後等デイサービスで仕事しています。その仕事場に、ぼくは小さなころから今でも毎週末行っています。今まで考えたことはなかったけれど、ぼくはそこでお友達を作る時、学校のみんなとはちがう入り方をしていることに気がきました。

みんなは、この子たちは障害を持っている子なんだと、障害のことから入っているような気がします。けれど、ぼくは障害のことより先に、仲良くなることから入り、仲が良くなってから、この子の障害は何なのだろうと思います。例えば、「車いす体験」に参加しなくても、お友達の車いすに乗って、いつも遊び道具のように扱って一緒に遊んでいます。だけど、みんなにはこの子たちのような障害のある子たちが周りにあまりいない。だから、「車いす体験」で障害について知るのだろうなと思いました。

お父さんのお友達に車いすバスケットチームの人がいます。その人の試合を観に行った時、車いすバスケットの車いすに乗せてもらったり、シュートをさせてもらったりしました。車いすバスケットは障害がないぼくでも車いすに乗れば参加できるスポーツだそうです。障害者スポーツは障害の人しか参加できないわけではなく、どんな人でも参加できるスポーツだということを知りました。ぼくは最近バスケットが好きなので車いすバスケット

楽しかったです。

さらに障害者スポーツは、障害や年齢性別関係なく色々な人たちとコミュニケーションがとれるので、生きていくには大切なことを学ぶこともできると思います。ぼくの体験は自慢するほどではないけれど、とても大事なことだと思いました。

最近「バリアフリー」という言葉をよく聞きます。調べてみると、「バリア（障害の壁）」を「フリー（除く）」こと、つまり、障害の壁となるものを取り除きだれでも生活しやすくすることを意味しているそうです。これを知って、ぼくはだれでも生活することの「だれでも」とは、どういう障害を持っている人のことなのか気になったので、さらに調べてみました。障害の種類は視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱・虚弱、発達障害、精神障害などがありました。その中でも最も多い障害の種類は、ぼくのお友達に多い肢体不自由でした。さらに、日本の中で障害者の総数は九三六・六万人です。障害や痛みを感じている人がこんなにたくさんいることを知りました。ぼくには障害をもったお友達がたくさんいます。最近出会ったお友達はいつも布のヘルメットをかぶっています。頭に管が入っていて、それを守るためにかぶっていると教えてもらいました。それからは、頭にボールが当たらないように気をつけて一緒に遊びました。ぼくはその子たちの障害を知って、遊ぶ時に気をつけてあげたほうがよいことを知りたいと思いました。これから、みんなが差別せずに、やさしく接してあげたり、そっとしてあげたりして、仲良くなれる社会になるといいなと思いました。





私が手話を勉強しようとしたきっかけ

幸田町立荻谷小学校 六年

村上 絢香

私が小学校三年生の三学期の時に、家の近くに耳の聞こえない家族が引っ越してきました。その家はお父さんとお母さんは耳が聞こえなくて耳が聞こえる小学生の男の子がいるとお母さんが教えてくれました。その子とは登校班が同じで、集合場所に、お母さんと一緒に来ていました。その男の子は、お母さんとすごく速く手話で話していました。さらにその男の子は、片手で手話をしていたので、すごいなと思いました。

私が手話を初めて見たのは、家に来たお母さんの会社の耳の聞こえない人とお母さんが手話で話している時でした。その時私は、何を話しているのかまったく分かりませんでした。会社の人が帰った後に

「どうしてそんなに手話ができるの？」

とお母さんに聞いてみました。そうしたら、

「お母さんが結婚する前に会社の職場に耳の聞こえない女性の新入社員が入ってきた時、お母さんがその子の世話係になったのがきっかけで手話を覚えたんだよ。」

と教えてくれました。

その後、学校でも福祉実践教室で手話を学んで、手話をもっと知りた

いと思いました。そこで、耳の聞こえない人の生活について少し調べてみました。耳の聞こえない人のことをろうあ者といいます。ろうあ者とは、一般的には、聴力損失が大きく、幼児期以前に失聴した人のことをろうあ者と言って

います。視覚的な手段（口話や手話など）でコミュニケーションをとります。全く声を出せない人もいれば、声で話すことができる人もいます。手話を第一言語にする人もいれば、そうでない人もいます。教育歴、生育歴によって読み書きが不十分な人もいれば、優れている人もいます。

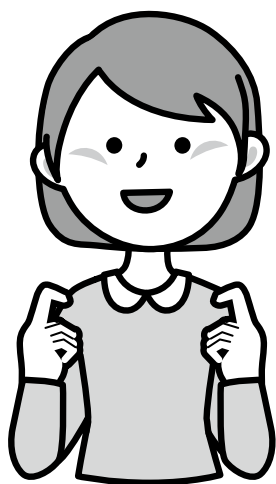
ろうあ者とのコミュニケーション方法は、一般的には、多くのろうあ者にとって、手話が一番自然な会話方法であり、安心して自分の気持ちや言いたいことを表現できる方法です。

私の行っている児童クラブに、その男の子は毎日来ます。おむかえはいつもお母さんで児童クラブの先生とは頭を下げてあいさつをするだけで、手話は使っていませんでした。そこで私はその子のお母さんと会話

がしたくて、児童クラブの先生にたのんで町の図書館で手話の本を借りてきてもらい、友達と一緒に、あいさつや指文字を勉強しました。だいぶ覚えてからその子のお母さんがむかえに来たときに、はじめて手話で会話が出来ました。その時、手話で返事をしてくれてとてもうれ

しかった。最近、ニュースやテレビ番組で字まく付きのものが増えました。手話

のドラマや映画も、有名になりました。私が今、少しずつ勉強してる手話を、もっとたくさんの方が勉強をし、手話を学んで、耳の聞こえない人がたくさんの人とずっと会話しやすくなればいいと思います。



身近な募金の大切さ

岡崎市立新香山中学校二年

市川 和樹

みなさんは、募金をしたことがありますか。学校で一年に数回ほど行われたりするため、一度はしたことがあると思います。では、学校以外ではどうでしょうか。コンビニやスーパーマーケットなど身近なところで行われている募金ですが、あまりお金を入れている人を僕は見たことがありません。そんな募金ですが、僕は小さいころから何回も行ってきました。

僕は小さいころ、東北地方にある宮城県に引っ越しました。親の仕事によるもので引っ越してからは、ずっと毎日楽しく生活していました。そんなある日、僕はお父さんと一緒に、とある海沿いの町へ行きました。駅を出て目に飛びこんできた景色を、今でもはっきりと覚えています。町には小さな商店街などしがなく、家などもほとんどありませんでした。なぜならこの町は、東日本大震災の津波によってたくさんのがなくなってしまう町だったからです。僕が行ったときは冬だったので、駅前に足湯がありました。僕は寒くてジリジリと感覚がなくなっていた指を足湯に入れながら、町を見渡しました。遠くの山にある新しいたくさんのお墓、ガタガタと耳に響くような音を出しながら動くたくさんの方の工事車両、夕日に照らされた海から聞こえるさわやかな波の音。僕はこの町の雰囲気を感じて、声一つ出すことができませんでした。足湯から

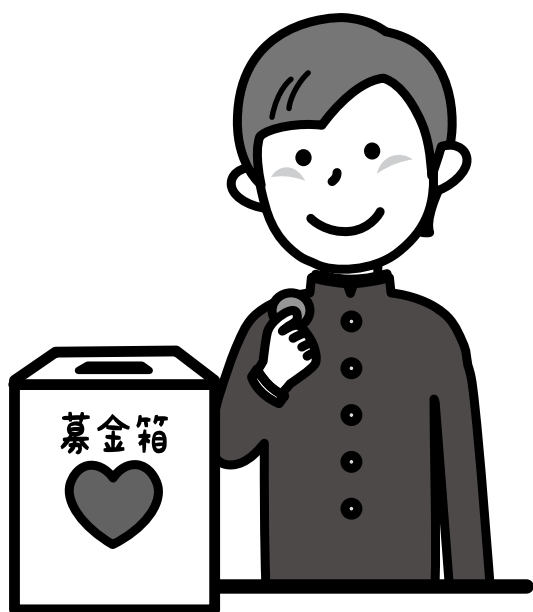
出て、商店街の方を見ると、店の中で父が友達と思われる店の人と話しているのが見えました。その人を見ると、こんな状況の中、とても笑顔で嬉しそうな顔をしていました。僕はその人の笑顔が気になり、話を聞きに行こうと思いましたが、それよりも町全体のことが気になり、友達のところには行かず、ただ町を眺めていました。そして、日が暮れ、帰る時間になった僕は、うまく表すことのできない気持ちに襲われながら電車で町を後にしました。

それから一年ほどたったある日のこと。僕は母に買い物を頼まれて出かけました。僕が住んでいたところのすぐ近くに薬局があったため、こうやって買い物に行くことはよくありました。その日もいつものように薬局へ行き、言われた物を選び、レジに並びました。そして自分の順番になり、商品をレジに置きすぐにお金を出しました。店員さんが会計をしている間、ひまになった僕はレジに置いてあった募金箱を見ました。そこには東日本大震災で被災地となった場所の復興に使われるというような内容が書かれていました。僕は当時、小学一年生でしたが、学校で震災のことを少し勉強していたので、すぐに「前見たところとかに使われるのかな」と思いました。そして、もうあんなさびしい町は見たくないという思いで募金箱に持っていた百円玉を入れました。これが初めての募金で、それから何回も募金をするようになりました。

何年か経って、ふとあの町が気になり、地図アプリで今の様子を見てみました。すると、想像の何倍も復興していました。自分が募金したお金が使われたのかなと思うと、誰かのためになれたのだと嬉しく思いました。そして募金することはとても大切なことなんだと、身に染みて感じました。僕はこの機会に父に当時の話をいろいろと聞いてみました。父は

「現地で何か物を買って町に貢献しようと思っていたけど、町の人が明るくて逆にパワーをもらったんだよ。」

と話してくれました。僕は友達の方が笑顔だったことを思い出してハッ



としました。そして単純に、僕をどうしてつれてったのかを聞くと、「将来的に被災地を通して物事をいろいろ考えるようになってほしいから。」

と言いました。僕はそれを今、作文という形で表現していて、父の思った通りになっていることに少し嬉しく思いました。

世界では、アフリカでの貧困、災害や人々の生活までさまざまな問題があります。そんな問題を解決するためにさまざまな場所で募金活動が行われています。募金をすることは自分のお金を減らすことになるので、あまり取り組む人は多くないかもしれないけれど、募金によって救われる人がたくさんいるので、みなさんも学校以外で、少しでもいいので募金をしてください。僕はこれからもずっと、募金をしていこうと思います。

普段の暮らしで幸せを感じる

知多市立旭南中学校二年

樋田 さくら

「人を幸せにするってことじゃない?」

福祉について考えるとき、私はこの言葉を必ず思い出す。

夏休み前のある日、学校でボランティアを募集する、厚い冊子が配られた。私は母にやってみないかと誘われて、軽い気持ちでやってみることにした。そのときの私は、夏課題の福祉体験作文に、ボランティアで経験したことを書けばいいや、としか考えていなかった。

私が体験することになったボランティアは、ある高齢者サロンだった。そこでは、たくさん的高齢者が話したり、工作をしたりしてとても楽しそうだった。私がそこでおこなったのはサロンの運営の手伝いだった。私に任せられたのは出来上がった料理を運ぶことと、お会計を手伝うことだった。失敗したこともあったけれど、楽しかったし、なにより大きなやりがいを感じることができた。そして、私はこのボランティアで、とても大切なことを学んだのだ。

ボランティアのときに私を担当してくれた人が、サロンについてたくさんのお話をしてくれたのだが、それはどれもびっくりすることばかりだった。ここで料理を作っている人たちは、私と同じボランティアでお給料は貰っていないそうだ。私は、てっきりお給料を貰っていると思っていたので、とても驚いた。なぜ、ボランティアなのかというと、食事代に加えて人件費もかかってしまうと、料金は自然と高くなってしまい、高齢者にとって行きやすい場所ではなくなってしまうかもしれないから

だ。それは避けたくて、ボランティアという手段を選んだそうだった。また、少し前に新型コロナウイルスが流行して、いろいろな場所が一時休業したことがあった。しかし、このサロンは時間短縮こそあったものの、休業する事はなかったそうだった。その理由は、このサロンが休業してしまつたら、高齢者がみんなと関わる場所がなくなってしまうからだった。このサロンでボランティアとして働いている人たちは、ここに来る高齢の人たちを大切に思っている。そして、このサロンを使っている地域の高齢者もサロンを必要としている。私がボランティアで学んだことは、誰かを大切に思うことだ。誰かに必要とされたら、それに応える。この関係はお互いが信頼し合い、お互いを大切に思う気持ちがないとできない。だから私は、この関係に憧れ、自分もそうなりたと思った。

『ふくし』ってどういう意味？」

「人を幸せにするってことじゃない？」

私が小学生のときに少し大人びた友達に福祉とは何かと聞いたことがある。その友達は「人を幸せにすること」ではないかと言っていた。それが正しいことなのか、今になって気になったので、福祉の漢字の意味を調べてみた。福祉の福とは「幸い。しあわせ。さいわいする」という意味で、幸せを表すことがわかった。そして、祉とは「天のくだす福が身にとどまる。さいわい」だそうだった。福祉の福も祉も「幸せ」という意味だった。つまり、福祉は幸せってことなんだなあ、と私はなんとなく思った。

では、「福祉は幸せ」とはどういう意味だろう。幸せと福祉は同じ意味で使える言葉ではない。幸せは形容詞、福祉は名詞である。つまり、「私は幸せです」を「私は福祉です」と言い換えることはできないということだ。では、「福祉は幸せ」とはどういう意味だろう。自分の「福祉は幸せ」という考えが合っているかわからない。なのに、どういう意味か、ということだけが頭の中をぐるぐる渦巻いていた。福祉を知っていたら幸せ？福祉があると幸せ？では福祉がなかったら幸せではないということ

と？

長い間考えた結果、私が思う「福祉は幸せ」とは、「福祉を意識できたら幸せ」であつた。私は、福祉は「ふだんのくらしのしあわせ」のふくしだということを知ることがあつた。だから私は、普段の暮らしで幸せなところを見つけたことができた。自然と「自分は幸せ」と思えるのではないかと考えたのだ。そして、私が思う、普段の暮らしの中で「幸せ」だと感じるべきことは、自分が誰かに必要とされているということだ。

私は、この世界で誰にも必要とされない人はいないと思っている。誰もが誰かや何かを必要としている。高齢者が地域のサロンを必要としているように。誰かに必要とされることは幸せなことだ。私は、誰かに必要とされたら、その人を幸せにするためにそれに応える。そして、そのことを幸せなことだと捉えられるような人になりたい。誰かを大切に思いたい。私はこの夏休みにそう思えるようになった。





福祉援助の大切さ

北名古屋市立天神中学校二年

水谷 心音

「福祉」とは何なのか調べてみると、「福祉とは幸せを意味する」と書いてありました。さらに、「人間が幸せになるための活動」を「福祉活動」や「社会福祉援助」と呼ぶのだということを知りました。例えば、高齢者の方を補助するための福祉施設や福祉サービスなどです。また、高齢者だけではなく身体的に不自由な方や、誰かの助けがないと生活していけない何らかの事情を抱えた方を救済するのも福祉活動だと知りました。その中で私が特に気になったのが、福祉施設や福祉サービスについてです。なぜなら、私にはアルツハイマー型認知症の祖父がいるからです。

私の祖父が認知症と診断されたのは、今から七年ぐらい前です。当時の私はまだ幼かったこともあり、「認知症」と言われてもよく分かりませんでした。母から「認知症はいろんなことを忘れてしまう病気」と教えられました。最初のうちは「少し忘れっぽいな」と思う程度で特に気にはしていませんでした。けれども、だんだんと物忘れの頻度が高くなっている、祖父を心配する反面、苛立つことが増えました。忘れてしまうのは仕方ないことだと分かっている、何度と同じことを聞かれると、「何回同じことを聞くの。何度と同じことを言わせないで。」

と、その場の感情の勢いで強く言ってしまうことが多々ありました。言ってしまった後は「強く言い過ぎた」といつも後悔していました。「そのときの気持ちは、ずっと残る」ということをインターネットで見たので、

これからはすぐに感情的にならないように気を付けて接しようと反省しました。

そのうち祖父は、物忘れだけでなくすぐに怒って怒鳴るようになりました。私が幼い頃、よく怪獣ごっこで遊んでくれた楽しい記憶しもなく怒られた記憶がないので、何か悪いことをしたわけでもないのに急に怒り出して怒鳴られたときは、とてもショックでした。

祖父の介護をしていた祖母が病気で入院することになったとき、祖父を介護施設に預けることになりました。環境が変わったからか、祖父は食事が出来なくなり入院することになりました。病院では点滴を嫌がって暴れて管を外してしまうので、どうすることも出来ず、衰弱していききました。祖父は「看取り」という形で家に帰されました。

病院では一切食べ物や口にしなかった祖父が、帰宅してからは徐々に食べられるようになりました。そして、衰弱して寝たきりだったのが、また自分で歩けるようになるまで回復したのには驚きました。そのとき、「いろんなことを忘れてしまっても、やっぱり気持ちは心に残っているんだ」と感じました。徐々に誰なのかも認識できなくなってしまうかもしれないと覚悟はしていても、実際私の名前を忘れてしまったときは、かなりショックでした。しかし、きっと心の片隅では、私のことを忘れていないと信じています。

祖父の自宅介護が始まってから、点滴やオムツを替えようとすると怒鳴って暴れだすので、祖母と母がとても困って大変そうでした。介護の大変さから祖母と母が喧嘩になってしまいうことも増えました。あまりに大変なので、介護ヘルパーの力を借りることになりました。ヘルパーさんは、怒鳴って暴れる祖父を上手になだめて手際よくこなしていくので、さすがだなと感じました。同時に、これで少しは祖母や母の負担が減ると思うと有難く思いました。

祖父は、自分で歩けるまで回復してからは、デイサービスに通っています。すぐに怒鳴って暴れだす祖父のことを、いつも優しくお世話して

くださるデイサービスの人たちは、本当にすごいなと思います。お陰で、祖母は安心して仕事に行けるし、祖母と母は少しでも自由な時間ができたので心にゆとりが生まれたと思います。

「福祉」とは人が幸せになること。祖父が幸せになることだけでなく、その家族も幸せにしてくれる福祉援助。現在、それを必要とする人々がたくさんいます。介護ヘルパーやデイサービスの方々の存在がとても大きなものであることを身にしみて感じました。私も将来困っている人たちの手助けが出来る人になりたいと強く思います。まずは、祖母や母の負担を少しでも減らせるように、祖父に対して、今自分ができることをやっていこうと思います。



乗りこえた先には

弥富市立弥富中学校二年

村上 琴音

私の弟は生まれつき心臓病を患っている。そんな弟は無事に、今年で七歳の小学二年生になった。重い物が持てないのでランドセルが背負えなかったり、皆と同じように班で歩いて通学することはできない。けれど、毎日

「今日は新しい歌を覚えたんだよ。」

「先生にいっぱい褒められたよ。」

と、楽しそうに学校での出来事を話してくれる姿を見ているととても嬉しい気持ちになる。これまで、たくさんの大きな壁にぶつかってきたことを私は知っているから。

弟は、生まれてすぐに心臓に異常が見つかり、救急車で大学病院へと運ばれた。約半日におよぶ大きな手術を受け、危険な状態だったがなんとか命をつないでもらった。それから成長することに何度も手術をし、入院、退院を繰り返してきた。弱音ひとつ吐かず。また、弟は人と話しをすることが何よりも好きだ。入院中、同じ病室になった子には必ず自分から話しかけに行くくらいに。長い入院生活で幼稚園や保育園に通えず悲しい思いをしただろう。その分、小学校ではたくさん楽しんでほしいと家族皆が思っていた。

小学校に入る前、父と母は弟を「特別支援学校」に入れるか、普通学校の「特別支援学級」に入れるかとても悩んだという。弟は、皆のように体を動かすことができないし、周りの子よりも少し学習スピードが遅



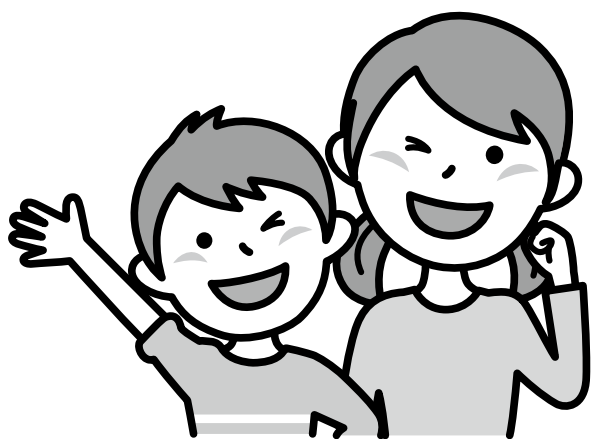
い。普通学校は特別支援学校と比べて障害のある子への設備があまり整っていないかったり、他の子とのトラブルが起こりやすかったりする。それなら絶対に支援学校の方がいいのではないかと私は思ったが、両親は、最終的に普通学校へ通わせるという決断をした。学校側は、弟のためにクラスを作ってくれたり、支援員さんをつけたりしてくれたさうだ。けれどまだ、両親が普通学校に通わせようと決めた理由は分からないままだった。私は中学校が早帰りの日に、弟の様子を見に行くことにした。教室をのぞいて見ると、たくさんの友達に囲まれて楽しそうに話している弟の姿を見つけた。そのまま教室を見つめていると、弟のまわりにいた一人の女の子が私の姿に気づいて手を振ってくれた。すぐに弟も私に気づき笑顔で手を振った。この笑顔を見た瞬間私は、はっとした。あの時の両親の選択はこのためだったんだ、間違っていないかったんだあと。設備が整っていないくても、トラブルが起こるかもしれないくても、一番大切なのは自分が「楽しめるかどうか」だってことをその笑顔が気づかせてくれた。私の両親は設備よりも弟の「個性」を尊重したのだ。設備がどうしてもいいわけではないが、優しく強い心を持っている弟のまわりには、優しい人達で溢れている。ずっとそばで見守ってくれている支援員さん、工夫して授業をしてくれる先生達、移動教室の時に荷物を持つのを手伝ってくれる友達、毎日話しかけてくれる友達。そんな支えてくれる人達のおかげで弟は、毎日楽しく学校生活が送れている。本当にありがとう。ここには弟の最高の居場所が作られていた。

一方で辛い事だったたくさんある。先日、家族で遊びに行った時の話だ。弟は長時間歩くと心臓に負担がかかったり、体調が悪くなったりしてしまうので出かける時は基本的に車いすに乗っている。また、行ける場所も少し限られてくるので私たちにとっては貴重な外出だった。私が車いすを押して歩いていると、まわりからジロジロ見られていたり、小声で何かを言われたり、指をさされることだってあった。車いすに座っている弟から見ると、上から覗き込まれているようでもとても怖いそう。

たしかに、車いすは少し珍しいかもしれない。けれど、気になる事や知りたい事があるのなら直接聞いてほしいな。少し勇気が必要だが、私は何度でも答えるから。そして、弟がこの壁を乗り越えることができるのなら。

別に、無理して声をかけると言っているわけではない。もちろん嬉しい事だっただけたくさんある。エレベーターで並んでいたら前の人が「先どうぞ。」と譲ってくれたり、デコボコな道で車いすのタイヤが道路のみぞにはまってしまったときに「大丈夫ですか。」と助けてくれたり。胸がポカポカと温かい気持ちになる。

ただ弟は人より少し心臓が弱いだけで、皆と同じ人間だから。弟の戦いはまだまだ続いてゆく。辛い事、嬉しい事、これから先もたくさんあるだろう。でも、大丈夫。私の弟は強いから。どんな事だって乗り越えられるから。温かく見守っていてほしい。乗りこえた先には、また、楽しい未来が待っているから。



兄から学んだこと

春日井市立柏原中学校三年

荒井 仁文

僕には兄が二人います。上の兄は僕より六歳年上です。その兄は中学二年生の夏休みに自転車で転んでブロック塀の角で頭を打ち救急車で市民病院に運ばれました。緊急手術をして命は助かりましたが、三ヶ月間意識不明の重体となりました。

三ヶ月後にリハビリ病院へ転院して、少しずつ意識が戻りましたが、言語障害と右半身のまひが残り、兄は障害者になりました。

一年後リハビリ病院を退院した兄は特別支援学校の高等部に入学しました。

兄が入学した特別支援学校は、小学部から高等部までの肢体不自由の障害がある生徒が通う学校でした。なので、半分以上は車イスを使い、歩ける生徒でも杖を使っていたり足に装具をつけていました。

僕はまだ小学生だったので、学校が休みの時は兄の送迎バス乗り場や学校行事などに母について行っていました。

特別支援学校の運動会を見に行ったことがあります。その時はとても驚きました。車イスや足に装具を付けた子だけではなくて呼吸器を付けてベッドで参加している子もいました。それでもみんなが楽しめるように工夫をした競技が色々あって、障害の軽い子が障害の重い子をフォローしてチームが勝利できるように頑張る姿は健常者の僕たちと何も変わらなかったからです。

下の兄と買い物へ行った時こんなことがありました。おじいさんが座

る車イスをおばあさんがおしてお店に入ろうとした時、自動ドアの少しの溝に車イスのタイヤがひっかかってしまつて前に進めなくなっていたのです。

周りを通る人たちは気にしてちらつと見るけど何かするわけじゃなくて、おばあさんは焦つた感じで力を入れて押すけど全然前に進めなくて困っていたのです。その時、兄が近寄つて行つて、大丈夫ですかと声をかけて車イスの前のタイヤをキュツと持ち上げました。

ほんのちよつとの段差に車イスのタイヤは引つかかるのです。でも、車イスを使ったことのない人は分からないのです。通りすぎた人たちはおばあさんが困つてそうだけど、声をかけるべきなのか、どうお手伝いしたらいいのかわからないのです。

車イスに自分よりも体の大きい人を乗せておすのは大変なことなのです。ほんの少しの上り坂でもものすごく力があるし、ほんの少しの下り坂でもスピードが出てしまうので、しっかり持っていないと危険です。歩道にはこんなに段差があることも車イスを使つたことがないと分かりません。雨の日は特に大変です。車移動だとしても車に乗る時、屋根がないと乗る人も押す人も傘をさすことができないのでカッパを着ていないとぬれてしまいます。

車イスだけでなく、世の中には目の不自由な人、耳の不自由な人、兄のように言葉の不自由な人、その他にも色々な障害を持っている人がたくさんいます。

その人たちが何か困っていたらすぐに気が付いて、みんなが自然に声をかけて、お手伝いできるような世の中になったらいいと思いました。でも、身近に障害を持った人がいないとその気持ちはあつても、どうしていいのかわからないのも分かります。

僕は体の不自由な人の大変さをもつとみんなが知るべきだと思います。もつと体の不自由な人に会うべきだと思います。

そこでぼくは、小学校や中学校から特別支援学校へ行く授業があつた



らしいと考えました。一緒に授業を受けたり、一緒に給食を食べたり、放課におしゃべりしたりして、何日か一緒に過ごす時間が定期的にあったらいいと思います。

小さい頃から体の不自由な人を少しでも理解できていたら障害者マーカーをつけている人が困っている時に自然に声をかけてお手伝いができるようになると思います。そしてみんなが自然に声をかけられるようになったら、障害をもっている人自身も気をつかうことなく人に助けを求めることができるようになると思います。

僕はそんな世の中になればいいと考えています。

私が見た輪

春日井市立柏原中学校三年

荻野 愛香莉

私の祖父は今年、運転免許を返納しました。免許を返納することについては、三年ほど前から祖父母と父が何度も相談していた話で、父はそれができてほっとしていました。しかし、祖父は渋っていたのもあり少し不安そうな顔をしていました。でも今、祖父母はとても笑顔で、ご近所さんと仲よく静かに暮らしています。それができているのは、周りの人たちの支えがあるからです。

私の祖父母は、田舎に住んでいます。バスの本数が少なく、交通の便ではお世辞にもいいと言えない場所です。スーパーに行くにも車で十五分ほどかかり、道も山の影響で上がり下がり激しいため、祖父母にとって車は生活するのに必要不可欠でした。

二〇一九年四月十九日、東京都で高齢者が運転していた車が歩行者、自転車らを次々はね、計十一人を死傷させた事件が起きました。東池袋自動車暴走死傷事件です。この事件で、世間では高齢者ドライバーによる事故率の高まりや、危険運転が強く問題視されるようになりました。私の父も例外ではありません。この事件を知り父は「事故は起きてからでは、取り返しがつかないから、免許返納を考えてみないか。」と祖父母に相談を始めました。祖父もこの事件を知っていたため領いて父の話を聞いていましたが、交通の不便さや、二週間に一回ある通院、そしてなにより高齢であるため、何かあった時すぐに病院へ行けないことへの不安を父に話していました。実際、車なしで祖父母だけで暮らすのは不可

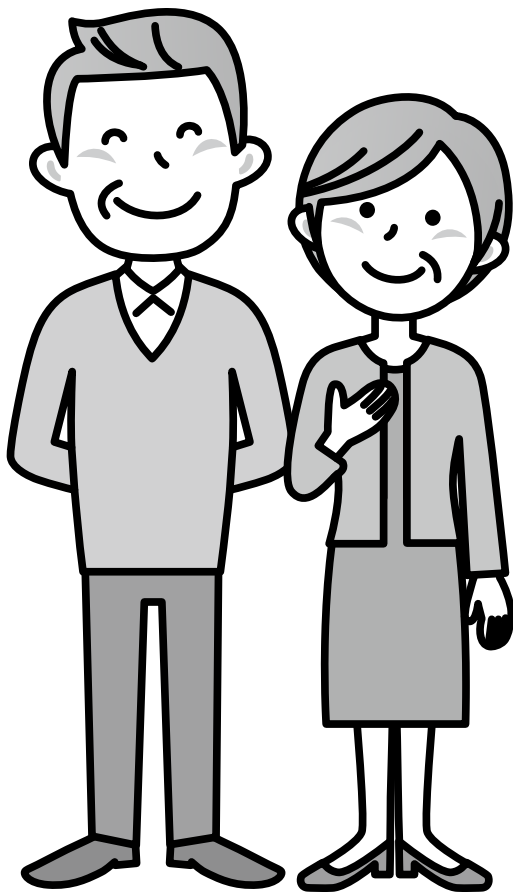
能であり、私の家と祖父母の家は車で二時間ほどの距離があります。祖父が、免許返納を渋るのは無理もないなと思いました。父はその日を境に、頻繁に祖父母の家へ訪れるようになりました。私はこの時、父が何を考えているのか全くわかりませんでした。

月日が経ち、去年の秋頃父に祖父が免許返納を決断したことを聞きました。私はとても驚くと同時に、祖父母が心配になって夜遅くに電話したのを覚えています。私はそこで祖父母から聞いた話にもっと驚きました。まずスーパーへ行くのに車で十五分かかる問題について、週に四回お弁当を届けてくれる配達サービスを使い、私の母が一、二週間に一度作り置きのおかずを祖父母の家に届けに行きます。次に、祖父母が好きなお菓子類は近所さんが代わりに買ってきてくださることになりました。「今までと変わらず、食べ物に困らない生活が送れる」と話しており、本当にありがたいと思いました。そして、病院への交通の不便さについては、二週間に一回の送迎を担当することになりました。普段の生活については、近所さんが様子を見に行ってください、メールで父に知らせてくれます。時には車も出してもらっているらしく祖父母の不安が少し和らいでると話していました。これを聞いて私は嬉しくなり父に「これで祖父母が事故を起こすことはないね。」「近所さん、親切な方ですよかったですね。」と言いました。すると父が、「祖父母は、近所付き合っちゃんとやってたし、自分が近所さんに用事を頼む代わりに、町内の手伝いに頻繁に行くようにしているからな。」と言いました。そこで、私は父が頻繁に祖父母の家へ訪れていたのは、免許返納の説得のためだけではないことを知りました。父にくわしく聞くと、町の行事や消防団、近所さんの田畑仕事や家事を手伝うことによって父も祖父母の近所付き合いを始めたと話してくれました。私はこの電話で話した数十分で、人のつながりの大切さを知りました。

この話から私は、祖父母にできたつながりの輪のような物を感じました。それと同時に、その輪は自分自身の行動で大きくも小さくもなるこ

とを知りました。祖父母が今、笑顔で暮らしていることが何よりの証明だと思っています。

私は、家族や、周りの方々に教えていただいた、人のつながりの大切さ、尊さを忘れることなく、人に思いやりを持ちたいです。そしてお互いにとっても良い関係でいられるつながりの輪を大事に、人と助け合って生きていける、そんな人間になりたいと強く思いました。





大好きなお父さん

西尾市立寺津中学校三年

小林 桃子

私のお父さんは、私が一歳になる前に、バイクの事故で車イス生活になってしまいました。

それでもお父さんは、ベッドから自分で起きあがることもできるし、お風呂にも入れるし、車でも、船でも自分で運転できます。

私はそんなお父さんのことがすごく大好きです。

でも、やっぱり、人と違うことを

「かわいそう」

と言う人もいます。

友達を家と呼ぶと、

「お父さん、車イスなんだ、かわいそう。」

と言われることがありました。

「どうして？」

と聞くと、

「だって普通のお父さんじゃないから。」

と返されました。

お父さんが車イスで生活していたら、普通のお父さんではなくなってしまうのか。

私は、大好きなお父さんを否定されて、すごく悲しかったです。

でも私は、お父さんが車イスで生活しているのを友達に知られることを嫌だな、とか、はずかしいと思うことは、一度もありません。

周りにどんなことを言われようと、お父さんは、私にとってすごくかっこよくて、優しい、自慢のお父さんだからです。

私は、何かうれしいことや、悲しかったことがあった時、お父さんの部屋に行って話を聞いてもらいます。

その時、お父さんはいつも、

「今できることの最善をつくしなさい。」

と教えてくれます。

お父さんは、車イスで生活することが決まったとき、ショックな思いをしたと思います。

それでも、お父さんはすぐに立ち直って、車イスでもお風呂に入れるように、車を運転できるようにと、たくさん練習していたとお母さんが教えてくれました。

私はなにかある度に、

「どうしてこうなってしまったんだろう。」

とずっと考えてしまいます。

だから、すぐに立ち直って行動できるお父さんはすごいなと感心しています。

私はそれから、どんなことがあっても、今できることはなにかと考えながら生活することを心がけました。

私は学校に行くのがすごく嫌になったことがありました。

だんだん勉強が難しくなってきた、ついていけなくなりました。

受験があるのにこんなことで大丈夫なのかと不安になり、ちゃんと授業に参加しようと思うけれど、自分以外みんな当たり前のようについていける顔をしていて、自分だけどんな取り残されているという空気がすごく怖くて、すごくつらかったです。

そんな時、お父さんの言葉を思い出して、今なにをするべきかを考えました。

学校で勉強できないなら、ちがう場所でやればいい。ついていけなかつ

たら、はじめからやればいいと思うようになりました。
そこで、お母さんが、塾に行こうかと言ってくれて、塾に通うようになりしました。

そこから塾で勉強して、授業についていけるようになりました。

授業がわかるようになると、学校も楽しくなりました。

お父さんにすごく感謝しています。

お父さんのことを普通のお父さんじゃないと言われて悲しかったけれど、ずっと悲しいと思っているばかりでは、一歩も前に進むことができません。

差別をなくしていくために今できる最善のことは、より多くの人に体が不自由でも、努力して、最善をつくしている人がいるということを知ってもらおうことだと思いました。

お父さんのような人のことを知ってもらえたらいいなと思います。



世代を超えて「共生」する

長久手市立南中学校三年

川本 芽依

朝早く、私はドキドキする胸の鼓動を抑えて、老人ホームの前に立っていた。ボランティア活動を通じて誰かを笑顔にするために。忘れられない思い出になると確信して。人生で初めて、老人ホームに足を踏み入れた。

見渡すとそこに住むおじいさん、おばあさん達が椅子に座って団らんしていた。とてもきれいで涼しい環境の中。まずは一人一人に挨拶。八十歳を超えている人が多く、中には百歳近くの人もいた。私の祖父母よりも一回り年上で、正直どのように接すれば良いのかよく分からなかった。

実際、仲を深めようと思い声をかけてみても返事が返ってこなかったり、耳が遠くてゆっくりと大きな声を出す必要があったり人様々。また、あまり何を言っているのか聞き取れず、ただ笑みを浮かべるしか出来ないこともあった。老人ホームの職員の方が教えてくれた「耳は死ぬまで聞こえているから声をかけ続けてあげて」という言葉を何度も思い出して、話をするということを意識して頑張った。しかし、話題が無くなつて無言になってしまうこともあった。その度に一緒にボランティア活動をしている友達の盛り上がる声、楽しそうに話す声が聞こえ、それに比べて私は…と考えてしまう自分がいた。

一方、笑顔でいると笑顔の輪が広がっていくことを実感した。自らおじいさん、おばあさんと目を合わすようにし、目が合ったらニコツと笑い



かける。そうすると、相手もとびきりの笑顔を見せてくれるのだ。言葉を交わさなくても心が通じ合う。私は温かい気持ちに包まれた。

認知症の人もいた。突然よく分からない話をされて、その人の話を肯定するべきなのか否定するべきなのか：どのように対応しようかと頭の中で必至に思いを巡らしていると職員の方が助け船を出してくれた。後で職員の方や友達はどうのように対応しているのか確認してみると、受け流す時もあったが基本的に肯定していた。これは自尊心を傷つけないため、ストレスを与えないためだと考えた。いずれ介護する時が私にも訪れるだろう。祖父母や両親が認知症になってしまった時に、この対応の仕方を活かしたい。

おやつには、かき氷を作って食べた。「きれいだね」「冷たいね」と、一言二言会話をしながら食べるかき氷は今まで食べた中で一番美味しかった。

その後、みんなそれぞれうちわに絵の具で何か自分が思うがままに絵を描いた。個性があふれており、美しい赤富士や、向日葵を描く人もいた。私はある一人のおばあさんの隣に座った。その人はあまり筆をつかむことが出来なかった。しかし、おばあさんが着ていた淡い桃色に筆を染めて。一緒に描こうと声をかけると、おばあさんはうなずいて、筆をつかもうと頑張ってくれた。職員の方や友達の支えの下、二人で世界に一つだけのうちわを完成させることが出来た。声をかけても返事が返ってくることは無かったが、うちわが完成した後はまるで「ありがとう」と言っているように私の背中をそっとたたき、一つに縛った髪を触ってくれた。たまらなく嬉しくなった。言葉が返って来なくても良い。そんなことを気にせずに声をかけ続けるといった、相手のことを考えた行動の方が大切だと気付かされた。帰る時にはもう帰るのと悲しがる人もいてくれた。「またすぐに来るよ」と、私は最高の笑顔で言葉を返した。この活動にすぐくやりがいを感じていた。

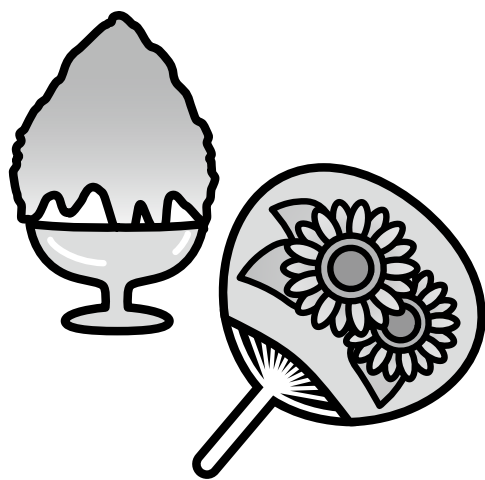
また、次もあると当然のように思っていた。一日目の反省を活かして、

どのような話題だったらお互い楽しめるのか考えていた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で中止されてしまった。それを聞いた時、残念に思った。同時に老人ホームに行き、おじいさん、おばあさん達とお話することを心待ちにしていたことに気付かされた。

今年の夏はもう行けないが、また来年その老人ホームに行ってみようと思う。そして老人ホームだけでなく、他のボランティア活動にも参加したい。初めてのボランティア活動で最初は不安で胸が押しつぶされそうだったが、そんな自分を老人ホームにいる皆は快く受け入れてくれた。この一日間はとても濃く自分を成長させてくれる貴重な経験となった。

このボランティア活動を通じて、共生という言葉を変えて考えた。共に生きると書いて共生。果たして私は出来ているのだろうか。人は誰しも必ず老いていく。年齢が異なるだけで関わりがあまり無いのは悲しいことである。日本は今、少子高齢化が進んでいる。どの世代も生きづらくならないようにするために積極的に世代を超えて共生することが重要だと考えた。

地域の関わりが少なくなっている今、中学生として何が出来るか考えていきたい。



父の病から学んだこと

学校法人さくら学園
安城生活福祉高等専修学校二年

山本 悠真

それは突然の出来事だった。

「今日はひな祭だし、家に女の子いないけど、晩ご飯、ちらし寿司にでもする？」

と母が言った。僕も寿司は久しぶりだったので、晩ご飯の時間を楽しみにしていた。夕方になり、父が帰宅した時、父の顔がこわばっていたのを感じた。

「どうしたの？」

と父に聞くと、一生懸命平静を装っているのが明らかに分かる様子で、「健診の再検査で、初期のがんですって言われた。」

と言った。僕は、それを聞いた時、いまいち実感が湧かず、大したことはないだろうと言い聞かせていた。しかし、どうしても気になり、がんについて調べてみることにした。そして、母に詳しい話を聞き、事の重大さを知った時、突然不安が襲ってきた。もしかしたら、父が死んでしまいかもしれないという現実には、押しつぶされてしまいそうだった。

二週間後、父は手術をした。手術により切除した部位の検体検査により、その日にリンパに転移していることが分かった。手術後、医師からは、抗がん剤治療が必要であると説明された。抗がん剤治療が、どのくらいの期間を要し、どのような副作用があるのか、この時には僕は全く

知らなかった。

父の退院後、僕の家族の日常が一変することになった。父の抗がん剤治療の通院や看病を母が中心に仕事の合間にこなした。そのため、家事は学校から帰宅後、兄弟で分担して行った。抗がん剤治療をした当日は、強烈な吐き気と倦怠感に襲われ、父は本当に辛そうだった。僕は何かできることはないかと考えた。そして、消化の良い食べ物を作ったり、病院から帰宅後、気持ちの良い部屋で休んでほしいと思い、寝室の空気を入れ換えたりした。父は辛そうなかでも僕たちに、

「ありがとう。大丈夫だから。」

と笑顔で言った。しかし、体調が悪い中で、胸が締めつけられる思いがした。

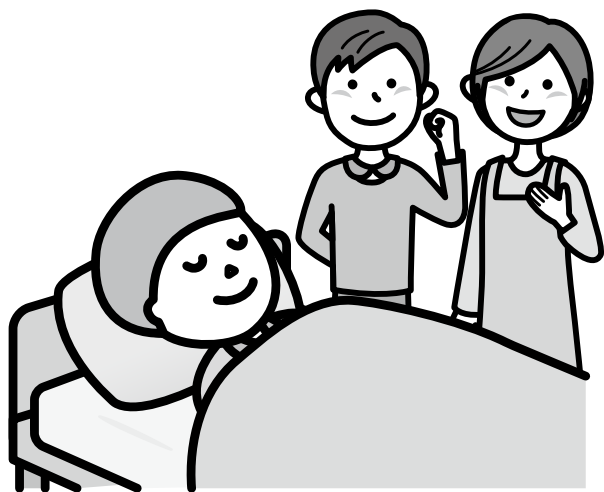
ある日、少し友人と遊んで帰った僕に、母から小言を言われてしまった。その時は、どうしてこんなことを言われなければいけないのかと思っただが、毎日の仕事に看病と忙しく過ごしている母のことを考えると、申し訳ない気持ちになった。それから、母が今、困っていることを聞き、家族全員でできることを分担していくことに決めた。

休日には、母にも休んでほしいと考え、家事は兄弟でこなした。母は、「ありがとう。明日からも頑張れそう。」

と嬉しそうに言った。それを見ていた父は、抗がん剤の治療後はやはり体調が悪く、辛そうな表情を見せていた。僕と弟は、父の背中をさすったり、水分が不足しないように、水や経口補水液を用意したりした。

長かった抗がん剤治療も終わった。父は副作用で髪の毛も抜けてしまったが、家族みんなが笑顔でいることで、頑張ろうと思えているようだった。検査結果は今のところ良好だが、まだ油断はできない。日毎に体調も以前のように回復してきている。これからは、父だけではなく、僕たち家族も風邪を引かないように気をつけるようになった。免疫力が低下している父にうつさないためだ。父は家族みんなに、

「本当にありがとう。みんなの気持ちに伝わって、病気を追い出せた



よ。」
 と言ってくれた。周りの人の支えは、治療にも代え難い大切なものがあるのだと分かった。

父は仕事に復帰した。まだ無理はできないこともあり、家族の心配は尽きない。しかし、半年前の家族の日常に少しづつ、戻りつつある。今回の事で、家族の誰が、いつ介護される側になるのか分からないことを実感した。そして、介護する側の態度や想いがその症状を改善し、介護される側を精神的に支えていくことができると身をもって知ることができた。また、介護する側も孤独にせず、できる範囲で介護に携わることが必要であり、困ったときは、周りの人に頼ることが大切であると知った。この経験を、将来役立てていきたい。そして、介護される側も介護する側もどちらにも無理がない毎日を送れるよう、僕が介護福祉士になり、家族の幸せを支えていくお手伝いをしたいと思っている。

当事者になって見えたもの

愛知県立桃陵高等学校二年

大井 麻奈加

まだ、私が中学生の頃のお話です。その日は学校が終わり、家に帰っている途中でした。私がふと横を見ると、よく見かけるおじいさんが畑仕事をしていました。そのおじいさんは、私の祖父とよく楽しそうに話をしているところを見かけるので、優しくな人と思っていました。そのため、私は気兼ねなくおじいさんに向かって、「こんにちわ」と挨拶をしました。しかし、私の挨拶におじいさんは返すことがありませんでした。挨拶が返って来なかった時、私は正直とても驚きました。「祖父とはあんなに楽しそうに話をしているのに、私の挨拶は返してくれないんだ。」と、とても落ち込みました。私は、何かおじいさんにとっていつの間にか嫌なことをしたのではないか。だから怒ってしまい、無視をしたのではないか。そしておじいさんにとっても、嫌な人からは挨拶されない方がよいのではないか。それがおじいさんが望んでいることなのではないか。という結論になりました。そしてわたしは勝手におじいさんを悪者にし、私は可哀想な被害者という被害妄想だけが膨らむようになりました。次の日の帰り、その日はおじいさんだけではなく、おばあさんも一緒に畑仕事をしていました。昨日返事が返って来なかったトラウマがあったので、挨拶をしようか迷いました。しかし、このままではよくないのではないかと感じ、勇気を出して昨日と同様、「こんにちわ」と挨拶をしました。すると、私の声に気がついたおばあさんが挨拶を返してくれました。しかし、そのときもおじいさんは私の挨拶には見向きもせ

ず、熱心に畑仕事を続けていました。そのことに気がついたおばあさんが私に、

「ごめんね。おじいさんは耳が遠くて声が聞こえにくいのよ。だから、もしかしたら挨拶が返って来ない時があるかもしれない。その時はごめんさいね。」

と話して下さって、私はそのとき初めて、昨日おじいさんから挨拶が返って来ない理由を理解しました。そして私は、自分のことばかり考え、おじいさんの状況を考えることができていなかったことに気づきました。そしてそれは、相手の状況を考え、気持ちを知らうとすることができなかったからだと知りました。それ以降、おじいさんに分かりやすいように手を振り、「こんにちは」と大きな声でおじいさんに声が届くように声をかけることを心がけています。それから、おじいさんから挨拶が返って来ないという状況は無くなり、「今日は暑かったね」と話が続くようになり、おじいさんから「おかえり」と話しかけてくれるようになり、帰り道がとても楽しくなりました。これらの経験から、相手の立場に立つて考えること、視野を広く持つことが大切だと分かりました。

私は高校一年生の時、左足を骨折しました。そのとき、私だけでは階段を上り下りすることも、荷物を運ぶことさえも、どれだけ頑張っても一人ではできないことが多くありました。その時にクラスメイトが、「持つていくね。」や、「階段上がれそう?」と声をかけてくれました。自分が足を骨折して感じたことは、どれだけ、周りの人から「頼ってもらって大丈夫だからね」と言われても、こんなことのために相手の時間や労働を使わせて申し訳ない、という気持ちが勝ってしまい、「持つてほしい」などの小さいSOSを言葉に出すことの難しさを実感しました。そのため、「持つてあげてね」や、「手伝おうか」などの周りの人からの一声があるだけで助けが格段に求めやすくなり、ありがたいなと感じました。

また、私が電車に乗った時のことです。骨折した私を見た瞬間、すぐ

に席を立ち、座席を空けてくれた男性がいました。声などをかけられたわけではありませんが、その人なりの人の助け方にとっても心が温まりました。その男性の思いやりのある行動から、自分の行いが誰かの幸せを導くことができたらいなと、感じることができました。

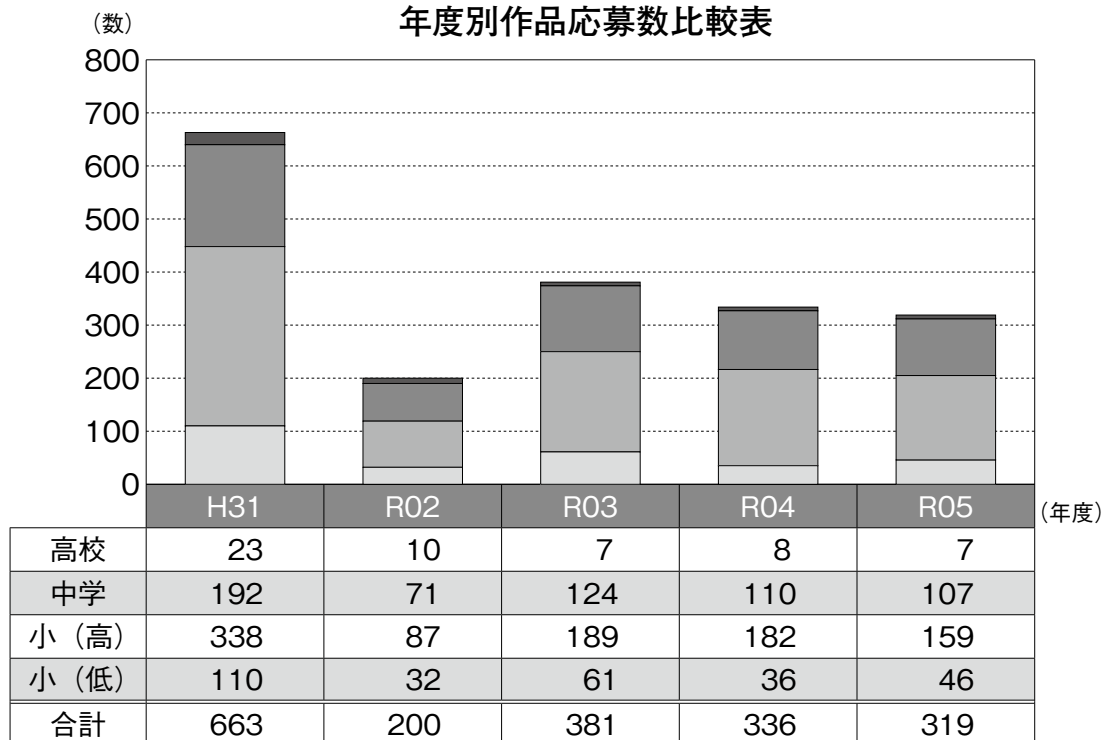
「福祉のこころ」は善意なので強要してはいけないものだと私は思います。しかし、その思いやる気持ちがあつてこそその社会だと思うので、誰かのためになれる人になりたいと思うと同時に、そういう大人が、さらに地域が増えていって欲しいなと感じました。私にできる範囲の「福祉のこころ」には制限があります。しかし、その小さい「福祉のこころ」を取りこぼさず、確実に誰かの心にわたせるように、「大丈夫ですか?」の些細な一言が言える人、相手の立場に立つて行動できる人、また自ら助けに行ける人になれたらいいなと思いました。そして、誰かの見本になれる大人になれるよう、行動していきたいと感じました。



■ 福祉体験作文コンクール ■

《応募状況》 応募総数 319編

年度別作品応募数比較表



《審査経過》

福祉体験作文コンクール選考委員会を次の方々に依頼し、募集要項に基づき厳正なる審査をし、部門毎に優秀作品を決定しました。

福祉体験作文コンクール選考委員

(敬称略)

石黒 学	櫻井 悟	江口 康彦	三好 宏和	岡崎 千賀子	杉山 雄一	船尾 日出志
愛知県社会福祉協議会地域福祉部長	美浜町社会福祉協議会事務局長	愛知県身体障害者福祉団体連合会常務理事兼事務局長	ユニバーサルサービス事業部	AJU自立の家わだちコンピュータハウス	愛知県教育委員会あいちの学び推進課	愛知教育大学名誉教授

令和五年度 福祉体験作文コンクール募集要項

一、趣 旨

児童・生徒が、学校内外で体験する福祉活動やボランティア活動は自己の幅を広げるための豊かな経験となるものであり、ともに生きる福祉の心を育ててくれるものです。

こうした経験を通して感じたことや考えたことを、素直な気持ちで作文に表わしたものが心に残り、日常生活の中で広がっていくことを期待して、福祉体験作文を募集します。

二、主 催

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

三、応募対象

趣旨に賛同する愛知県内（名古屋市を除く）の小・中・高等学校及び特別支援学校の児童・生徒

四、応募作品の内容

学校での福祉実践教室やボランティア活動等の体験、地域や家庭、身近なところでの体験について、自分の考えや感じたことを表現したものとします。

五、部 門

(一) 小学校低学年の部（一～三年生）

(二) 小学校高学年の部（四～六年生）

(三) 中学校の部

(四) 高等学校の部

六、作品規定

(一) 四〇〇字詰め原稿用紙（タテ書）を使用し、各部門の枚数制限は次のとおりとします。

ア 小学校低学年（一～三年生）——一～三枚以内（四〇〇字以上二二〇〇字以内）

イ 小学校高学年（四～六年生）——二～四枚以内（八〇〇字以上二六〇〇字以内）

ウ 中学校・高等学校——四～五枚以内（一六〇〇字以上二〇〇〇字以内）

※題名は一行目、学校学年氏名は二行目、本文は三行目から一マス空けて書いてください。

(二) 応募作品は、原則として自筆に限ります。ただし、障害等の場合はその限りではありません。その旨を明記してください。

(三) 応募作品には、所定の応募票を添付してください。

七、応募規定

(一) 小学校及び中学校の応募数は各部門二編以内、高等学校は三編以内とします。

(参考)

小学校低学年 一校につき 二編以内（一～三年生）

小学校高学年 一校につき 二編以内（四～六年生）

中学校 一校につき 二編以内

高等学校 一校につき 三編以内

(二) 応募作品は、未発表のものに限ります。

(三) 応募作品は、理由のいかんにかかわらず返却しません。

八、応募方法

下記の応募票を添付し、学校のある市町村の社会福祉協議会に令和五年九月十五日（金）までに応募してください。

九、選 考

選考委員会を設けて、部門ごとに入選作品を合計二十五編程度選考し、令和六年二月（予定）に発表します。

十、表彰等

入選者には賞状、副賞及び優秀作品集を贈呈します。

十一、作品集の作成等

入選作品を掲載した優秀作品集を作成するとともに、入選作品は愛知県社会福祉協議会ボランティアセンターのホームページに掲載します。



令和5年度
第41回 福祉体験作文コンクール

優秀作品集

発行 社会福祉法人
愛知県社会福祉協議会

〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目50番地
愛知県社会福祉会館内
TEL(052)212-5502 FAX(052)212-5503

